第二十一師団通信隊員
中原会戦から仏印まで

岐阜県　井 上 秋 平

私は大正九（一九二〇）年三月一日、岐阜県吉城郡国府町瓜巣区で、伸之助の長男として生まれました。業は、屋根の葺師であり、神仏閣等の屋根、瓦ではない葦で葺く仕事であります。従って高山等の有名なお寺の屋根葺きを昭和二十六（一九五一）年頃やっていました。今で言う、文化財の修復などという仕事の一部でありました。

私は飛驒ではなく、東京神田駿河台（明治大学の裏）の錦華青年学校を卒業し、七年間、神田五軒町に住んでいい精米機の製造業の設計をやりました。その商社は精米機を朝鮮等に移出をしていました。

昭和十五年十二月一日、現役兵として、東部第五十四部隊（金沢の歩兵第七連隊の在った所）に入営、昭和十六年一月二十五日、北支派遣のため金沢を出発、二十六日、神戸港出発、三十一日、塘古上陸、第二十一師団通信隊に編入、二月二日、徐州到着、同地付近の警備に任ぜられました。

昭和十六年六月一日　一等兵

五月一日～十五日　中原作戦に参加

五月七日　江蘇省銅山県復州出発

六月十二日　移動のため、河南省済源県邵源鎮出発

六月十七日　河北省清県保定着、同日より同地警備

十月二十一日　河北省青苑県保定発

十月二十三日　青島着、同地にて作戦準備

十月二十九日～十一月十六日　第二次魯南剿共作戦参加

十一月十六日　A型パラチフスのため青島陸軍病院に入院

昭和十七年一月十七日　退院

このため、その後、体の具合が悪くなった。

一月十九日、仏印進駐のため青島港を出発
広東省と海南島の間を通って、台湾馬口で船団を組み、駆逐艦の護衛で出帆。
二月三日　仏領インドシナ海防に上陸
二月十二日　河内到着、同日より同地付近の警備に任ず
所謂　北部仏印進駐で、両国話し合い了解の上で、敵の抵抗なく、無血進駐であった。
三月三日　A型パラチフスの余後は芳しくなく、河内陸軍病院に入院
五月三十一日　臨時香港第二陸軍病院に転属
八月九日　香港出発
八月十六日　広島陸軍病院収容
八月二十五日　金沢陸軍病院に転送
昭和十八年四月九日　治癒退院、同日原隊復帰
十月二十日　臨時動員下令
十一月八日　東部第五十四部隊（金沢）転入
十一月十三日　臨時動員完結
十一月二十九日　上等兵
十一月三十日　現役延期解除令
十二月一日　予備役編入

―中原作戦―

北支派遣田中部隊（田中久一中将）中原会戦・記念写真帖には次の如く書かれている。

昭和十六年五月七日、日没ト同時ニ晋南豫北ノ山岳ニ永ク蟠踞シタ敵第一戦区司令衛立惶麾下約二十萬ノ中央軍ニ対シ殲滅ノ火蓋ヲ切ッタ田中・原田・櫻井ノ各部隊並ビニ若松・井関・安達・池上・清水・長野ノ各部隊ハ同日早クモ敵ノ主抵抗線ヲ突破シ安達・清水ノ両部隊ハ中條山脈ニ據ル敵第五集団軍ニ対シ外側包囲圏ヲ形成シタ。

一方櫻井部隊ハ董封鎮付近ニ於イテ天険ト堅固ナル陣地ニ據ル敵第十四集団軍第九十八軍ヲ力攻又沁陽平地方面ニ於イテハ田中・原田ノ両部隊済源付近ノ敵第九軍第四十七、第五十四師新編第二十四師ヲ猛攻其ノ陣地ヲ突破シ敗敵ヲ追撃、原田部隊ハ一部ヲ以テ狂口渡並ニ其ノ東南各渡河点ヲ占領シ、我ガ田中部隊ハ其

ノ先遣隊ヲ以テ十一日要衝邵源鎮ニ入リ別ニ太原方面ヨリ前進シ西陽村ヲ経テ入城セル大岩部隊ト共ニ第十四集団軍ノ退路ヲ完全ニ遮断シタ。

第五集団軍第八十軍ハ外側包囲圏ヲ圧縮セラレ中條山脈内ヲ潰乱彷徨ノ状態トナッタガ董封鎮付近ノ敵第十四集団軍ハ頗ル頑強ニ抵抗ヲ続ケ容易ニ退カズ我ガ田中部隊邵源鎮ヲ占領スルヤ直チニ邵源鎮並ビニ西陽村付近ヨリ北上横河村・東坡・新城山方面ニ進撃ヲ開始敵第十四集団軍ノ背後ニ迫ッタ。

第十四集団軍ハ我ガ穿貫突破ニ依ル背後攻撃ニ狼狽堅固ナル陣地ヲ放棄シ大行山脈ヲ潰走シ始メタ背後ヲ衝イタ生田・今田両部隊ノ如キハ駄馬スラ通過不能ノ峻険ヲ攀ヂ糧秣補給モ全クツカズ凡ユル困難ヲ克服シ所在ノ敵ヲ撃破シツツ北進シタノデアル。

今田部隊ハ十四日十時三十分横河村ニ入城、董封鎮方面ヨリ南進セル櫻井部隊ト感激ノ握手ヲ交シ我ガ包囲圏ヲ著シク縮少シタ。敵ハ糧食全然途絶エ木ノ葉、草ノ根ヲ食シ我ガ封鎖線ヲ血路ヲ拓イテ逸出南下セントシ再三総司令衛立惶ニ対シ救援ヲ要求シタガ時既ニ遅ク十萬ノ十四集団軍ハ潰滅ニ陥リ軍長劉茂恩ノ如キハ心労ノ極遂ニ病魔ノ為メ担架ニ乗リ手兵ニ衛ラレテ逃ゲ惑ヒ出シタ。

我ガ田中部隊ハ芮村塔地等狂口・垣曲間ノ各渡河点ヲ完全ニ封鎖シ包囲圏内ノ残敵ニ対シ果敢ナ掃蕩ヲ実施随所ニ戦果ヲ収メタガ就中二十二日天明「シナ山」「ホラ山」黄背嶺付近ニ蟄伏シアリシ約五千ノ敵ヲ包囲攻撃シタ三根・小松ノ両部隊ハ作戦ノ妙ヲ発揮シ奇襲ヲ以テ完全ニ之ヲ殲滅シ将兵ノ志気大イニ昂ツタ。

又黄河対岸ニ増強サレタ敵ニ対シ高見部隊ハ砲列ヲ布キ二十四・五ノ両日ニ亘リ一斉ニ火砲ノ集中弾ヲ以テ敵陣地掩蓋「トーチカ」ヲ片端カラ粉砕シタ。

斯クシテ中原会戦ハ黄河河北ヨリ蔣系直系軍ヲ一掃シ徐州会戦ニモ優ル大戦果ヲ収メ我ガ田中部隊ノ歴史ニ光輝アル数頁ヲ加ヘ参加セル将兵ノ記憶ニ永久ニ残ルモノガアルデアロウ。

筆者の中国における、初陣であり、緒戦は、右に掲

げる中原会戦であった。
田中部隊（第二十一師団）、櫻井（第三十三師団）、原田（第三十五師団）、井関（第三十六師団）、安達（第三十七師団）、清水（第四十一師団）、池上（独立混成第九旅団）、若松（独立混成第十六旅団）、長野（騎兵旅団）の北支方面軍の主力（六個師団・二個混成旅団・一個騎兵旅団の各主力）をもって、北支の治安を攪乱していた、衛立煌麾下の中央軍（二十六個師、約十八万）に対し徹底した包囲作戦を実施し、所期のとおり敵軍主力を捕捉撃滅したのである。
敵軍に与えた損害は捕虜三万五千人、遺棄死体約四万二千人を数え、日本軍の損害、戦死者六百七十三人、負傷者二千二百九十二人であった。その戦果は支那事変を通じてもまれに見るものであった。
「本作戦の目的は、晉（山西省）・豫（河南省）地区に蟠踞する中央軍主力を撃滅し、黄河以北における其の勢力を一掃するにあり」と、方面軍司令官は訓辞している。
本作戦における中国軍の惨敗は、北支の共産軍が協力応援しなかった結果によるものとして、重慶側は再三、第十八集団軍首脳を難詰した。中共側も、重慶のいうところは実行不可能を強いられるものとして応酬し、北支における国共関係は全く相背馳し、摩擦相剋はいよいよ激化しつつあった。
次の作戦は、第二次魯南作戦（南部山東省）
「ろ」号作戦　十一月五日〜十二月二十八日
本作戦は沂（沂州・沂水・蒙印陰）地区の中共軍を掃討しその根拠地を覆滅するとともに、第三次治安強化運動と併せ行い、治安粛正の画期的向上を図るを目的とした。
本作戦には第二十一師団（討）、第三十二師団（楓）および独立混成第五・第六・第七・第十旅団の主力および、配属の第一軍諸部隊（第三十六師団（雪）および独立混成第三・第四・第九旅団一部が参加。
第二十一旅団は膠済沿線の張店、青島地区に移動して作戦準備、
第二十一師団（歩兵十大隊）をもって沂水南北の線から西方に向かい、第十七・第三十二師団を以って包

囲した。
　第二次魯南剿共作戦、主として莒県、臨沂間に遮断壕を構築した。
　大作戦ではないが、中支方面へ工兵隊配属で一個分隊、五号無線を持って、鉄舟に乗って行った。対岸から弾丸を射って来て、鉄舟に穴があいたこともあり、工兵隊員が戦死し、その人を荼毘に付したこともあった。島に上陸したら男性は殆ど逃げ、女性と子供だけだったことが印象に残っている。
　我々に対抗する敵は共産軍が多くなって来たが、中支は新四軍であったのかもしれないが、我々通信兵にはよく分からなかった。工兵隊配属の討伐はそう長い期間ではなかった。
　青島へ行ってから、第二次剿共作戦の間私一人が、チフスにかかり、高熱のため食欲は無く、菌を調べる検査は咽喉から胃の所までゾンデーという管を飲み込むのが苦しかったことを今でも思い出す。
　その病が癒って、昭和十七年一月、先程も軍隊手帳による軍歴で述べたような、北部仏印進駐であった。その時は、師団通信としてであった。防諜名は、討第一四三九部隊となったのである。通信隊の兵力は一個中隊だから同年兵も少なくなかった。しかし、その隊のつながりは、今でもあり、戦友会を各県持ち回りで、実施している。長野・岐阜・富山・石川と、元第九師団関係者である。平成十四年は石川県が当番である。
　病院の思い出は、香港その他へ行ったが、今になれば、余り苦しいものではなかった。病気でなく、南部仏印、明号作戦等での戦いで戦死した戦友、先輩、後輩も居るが、内地帰還が一つの運命の別れであったかもしれない。